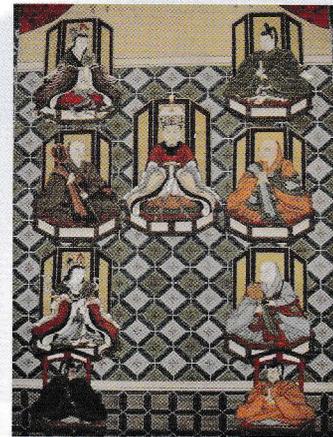


比叡山麓の村々が山王祭を支えてきた（江戸時代まで）

明治元年（1868）の神仏分離令によって、比叡山延暦寺は山王祭の関与を断絶されましたが、江戸時代までは主催者としての役割を担ってきました（現在の祭礼でも、いくつかの場面に延暦寺も参加されています）。山王祭七社の神輿は、下表のように三塔（東塔、西塔、横川）十六谷が担当し、担当の山門公人（くにん）が駕輿丁の采配などを担当。七基の神輿の担ぐのに、比叡山山麓の村々から700余名の駕輿丁が出仕したと、『月の桂』は伝えています。『月の桂』の時点では、坂本・下阪本の住民も加わっていたようですが、『祭礼次第』では周辺村々の動員数が増え、坂本・下阪本はそれ以

外の役職を担当していたようです。七社の神輿を動座させるには、比叡山山麓の村々の関与が欠かせなかったと考えられます。

山王祭を担う中心は、神事において祝詞（のりと）などを奏上し、現在の神職の役割を担う社司（しゃし）。そして、日常の維持管理など日吉大社の各社を護る僧侶の籍を持った宮仕（みやじ）。その他、民間の立場で山王祭を支えてきた山門公人。社司・宮仕・山門公人ともに山王祭遂行には欠かせない存在であったことを付記します。



山王曼荼羅

翻って、当時山王祭を担う構造は、日吉大社膝下の坂本・下阪本地域に限定されていませんでした。例えば、大榊神事は大津の天孫神社と平野神社、粟津御供は膳所五社、未之御供（ひつじのごく）は京都の山王町（京都市下京区）が担い、神輿をかつぐ駕輿丁は比叡山周辺の村々が担当し、船渡御は琵琶湖の各港から丸子船を奉仕するといったように、比叡山を中心に広範囲にわたって、山王祭を支える構造が機能していたと考えられます。現在も多くの人々の熱意に支えられる山王祭ですが、当時はそれ以上の人々が関与していたようです。

【備考】和田光生氏『江戸時代の山王祭について』参照

山王祭（江戸時代）七社の関わりについて

現社名	旧称 (明治以前)	祭神名	七社を担当する延暦寺の 谷	本地仏	神輿の担ぎ手 『月の桂』(1688年)	神輿の担ぎ手 『祭礼次第』(1837年)
西本宮	大宮	おこなむちのかみ 大己貴神	東塔(南谷)	釈迦如来	山中村	山中村
東本宮	二宮	おやまくいのかみ 大山咋神	西塔(北谷、東谷、南谷、 南尾谷、北尾谷)	薬師如来	(京都)八瀬村、高野村	八瀬村、高野村、 上仰木村、辻ヶ下村
宇佐宮	しょうしんし 聖真子	たごりひめのかみ 田心姫神	横川(兜率谷、般若谷、香芳 谷、解脱谷、戒心谷、飯室谷)	阿弥陀如来	千野村、雄琴村、 苗鹿村	千野村、雄琴村、 苗鹿村
牛尾宮	八王子	おやまくいのかみ 大山咋神 あらみたま 荒魂	東塔(西谷)	千手観音	(京都)修学院村 一乗寺村	修学院村、一乗寺村
白山宮	まろうど 客人	くくりひめのかみ 菊理姫神	東塔(無動寺)	十一面観音	高畑村、穴太村	高畑村、穴太村、真野村
樹下宮	十禅師	かまたまよりひめのかみ 鴨玉依姫神	東塔(東谷)	地藏菩薩	上坂本	滋賀里、南滋賀
三宮	三宮	かまたまよりひめのかみ 鴨玉依姫神 あらみたま 荒魂	東塔(北谷)	普賢菩薩	下坂本	平尾村、下仰木村



山王祭への協賛金をお願いします（下阪本駕輿丁より）【再掲】

山王祭は日吉大社と駕輿丁で執行します。神事は神職が、神輿は駕輿丁が仕切る祭りなのです。駕輿丁は神輿上げ・午の神事・宵宮落とし・神輿神幸・船渡御を担当します。それらを執行するには「人」と「資金」が必要です。祭りには老いも若きもが、業種を越えて参加し、山王祭を盛り上げてくれています。皆さん、駕輿丁に参加して下さい。一方、資金面はメンバーに加え、会社や事業所の協賛金に頼っています。皆さま方の協賛金には大変感謝しております。このような大事業・活動を維持していくには多くの資金が必要なのです。今までのように山王祭が執行できますように、何とぞ皆さまのお力添え・協賛金をお願いします。振込先は下記の通りです。

【レーク滋賀農業協同組合西大津支店】【口座番号：0035790】【普通】【下阪本駕輿丁 代表 津田長美】